

を疑ふやうな氣までする。又飛行機に乗つて雲中に突入したならば、丁度このやうなものだらうかと思ひ、濃氣は絶えず流動してゐるらしいので、自分は飛行機に乗つてゐるやうな氣がする。

「人夫さん晴れますかね」

昨夜、人夫と杓子、鍵行の話をしてゐた人が人夫に呼び掛けゐる。

「今朝の濃霧は解りませんな。鍵行きは少し危険ですよ。」

その人を始め、昨夜の賛同者は大分躊躇してゐるらしい。板倉氏でないが、濃霧のために九郎兵衛谷に墜落したら、等思つてゐるらしく、氣がのらん振り。

朝食も昨日の夕食と同じく、半煮飯にアザミ汁。たゞ一度の輕験で馴れたことか、大分進む。温いのが有難い。賑やかな食事。

外はまだ晴れぬ。風が妙なうなり聲を出し始めた。雲が馬より早く飛び散るのがよく見える。雲の切れ目に杓子の頭がぼんやり顯はれる。その様も實に美景だ。雄大なる景色である。

嗚呼、どう／＼杓子・鍵行きは斷念しなければなら

ないか。

時間はすぎる。いつまで待つてゐても晴れそうにな

いか。

かれこれする内、大部の人は思ひ／＼に下山する。取殘こされた吾々も、名残りは盡きぬが如何せん方もない。人夫の勧めによつて愈



詩 藻

五 中川 爾露龜千

或裏町に起つた一つの事

或木枯の夜
或裏町を通つた中折帽に二重マント姿の紳士は
吸ひ残しのタバコを投げ棄てゝ過ぎ去つた。
火の點いたまゝのタバコはその後
細かな火の粉を散らして轉がつてゐた。
その夜、そのことのあつた暫し後
笛をふきながら、片手に杖して
其處を通つたためしひらしい按摩があつた。
そしてその人は、偶然にかそれとも心あつてか
そのタバコを踏み消して行つたのだ。
その後の夜は嚴かに更けて行つた、
何のかはりもなかつた。

單と複とのこんがらがりの人の住む世の總ての事は
不可思議なのが本體なのか？。

晩秋に

五甲 中川 治郎吉

暖かい一日
湖邊に來て見る——なつかしの心もて——
ザクザクと快よく鳴る砂すれの音にも
動い沖を飛ぶ白鷗の群にも
慰めは受ける、が感興とて何等起らない
惟波の音……姑息——無智——爭鬭——自滅……
それは人間への挑戦の叫び

おお明るき油屋の店に立てば
灯のつける空車一つ
ひき手も見えず
覺ゆるは淡き悲しみ

或の船長のうたへる
ああ夜だ、すべての醜惡をつつむ夜だ
暗き波間の夜光蟲の
さびしき光りは波にゆれつつ

遠き船路を繰り返しつつ
老いたる淋しの船長の吾
今狂はしく舷に出でてはろばろと思ひを馳する

深き沈黙に船は歩みを進め
死に連れいく惱ましきスクリューの音の
うるさく耳にまつはる

頼りない海上の半生
絶えざる暴風雨の度に吾心無慘に蝕まれて

今彼等はめい／＼横になり
單調の船路に對する嫌惡の曲を
かなでる鼻歌の聲

憂愁に曇つた頬を上ぐれば
青く星はまたたきてピツタリと視線が合ふ

人生は短い
直ぐに死んでゐくのだ
空に消ゆる流星の光の様に

ああ永遠につづくはこの海と空

行きつく所はあの涙ぐむ青き星
永遠の安靜だ絶對的の陸地だ
併し海はいつまでも波打ち噪ぐものを

秋蛩のつぶやき

ああそれは

何故となく涙誘はるゝ
静かな宵

晩れ咲きの水仙

春雨がしどろと闇の中に泣いて居る
死に去りし友の忍び泣きにも似て

南蠻瓶に

投げ込みし

晩れ咲きの水仙が

淋しく本箱の上に沈黙のつゞき

次第々々に春雨の宵は更けて行く
死の静寂が闇と共に來た

友の別れの記念の萬年筆に

友が黒い輝きし瞳思ひ出されて

今宵またしのばる歸らぬ日

あはれ春の宵

永久に語るよ別離と追憶の色

聞ゆるか聞ぬか

夢の境にむせび泣く春雨

いづかたよりわが心をうつ

或夜の友の忍び泣きにも似て

心をも忍ぐらるゝおもひ

